

第9回 万葉こども賞コンクール

【作文の部 最優秀賞】

工藤 颯莉 さん

東京都在住 東京学芸大学附属国際中等教育学校2年

題材とした万葉歌

色深く 背なが衣は 染めましを 御坂たばらば ま清かに見む

卷二十 四四二四 物部刀自売

三十一音——それは狭い鳥籠のように感じられる。自由を制限されたかのようなようだ。だが、実はその狭い鳥籠の中で小鳥は何者にもなれるのだ。私たちは三十一音でどんな物語も語れる。三十一音の可能性は無限大なのだ。今日は、そんな三十一音の中で、ある愛の物語へと姿を変えた小鳥を紹介したいと思う。

この歌はある防人の妻が詠んだものである。防人とは北九州の防衛にあたった兵士たちのことで、当時は義務の一つであり兵役として課されていた。任期は三年とされていたが、実際には三年が過ぎても国に帰してもらえなかったり、帰る途中で行き倒れになったりすることがほとんどで、厳しく辛い任務であった。歌では、防人に出る夫の姿に、衣をもっと濃い色に染めておけば、御坂を越えるときにはつきりと見ることができたのに、と悔やむ妻の辛い思いが描かれている。

二度と帰ってこないかもしれない夫の姿を一秒でも長く瞳に焼きつけておこうと、その姿が見えなくなるまで眺めていたのであろう。その小さくなっていく背中にどれだけ大きな想いを馳せたのだろうか。そんな妻の惜別の辛さをさらにくつきりと浮きあがらせる。しかも、この歌には、その辛さを物語るようなさらなる秘密が隠されているのである。実はこの夫婦の家から御坂は見えないのである。この夫婦の家は今で言う埼玉県行田あたりに在り、足柄の御坂である箱根の峠は見えないはずがない。妻も絶対に見えないと分かっているはずだ。だが、見えると信じたい。どんなに遠く離れても夫を感じていたい。そんな複雑な想いもあったことが、三十一音の見えない裏側から分かる。どの辛い想いも全て、二人の深い愛が生んだのだ。深く深く愛しあっていたからこそ生まれた辛さなのだと思う。

今の日本には兵役という制度がない。なので、国のためではあるが、帰りの切符があるとは言いきれないような場所に大切な人を送り出さなければならぬ、という葛藤は未だかつて経験したことがない。この歌はそんな私に、大切な人と過こせる日常がどれほど特別で幸せなものかということを教えてくれた。

色深く背なが衣は染めましを御坂たばらばま清かに見む——胸が張り裂けるような、辛い辛い愛の物語……そんな三十一音であった。